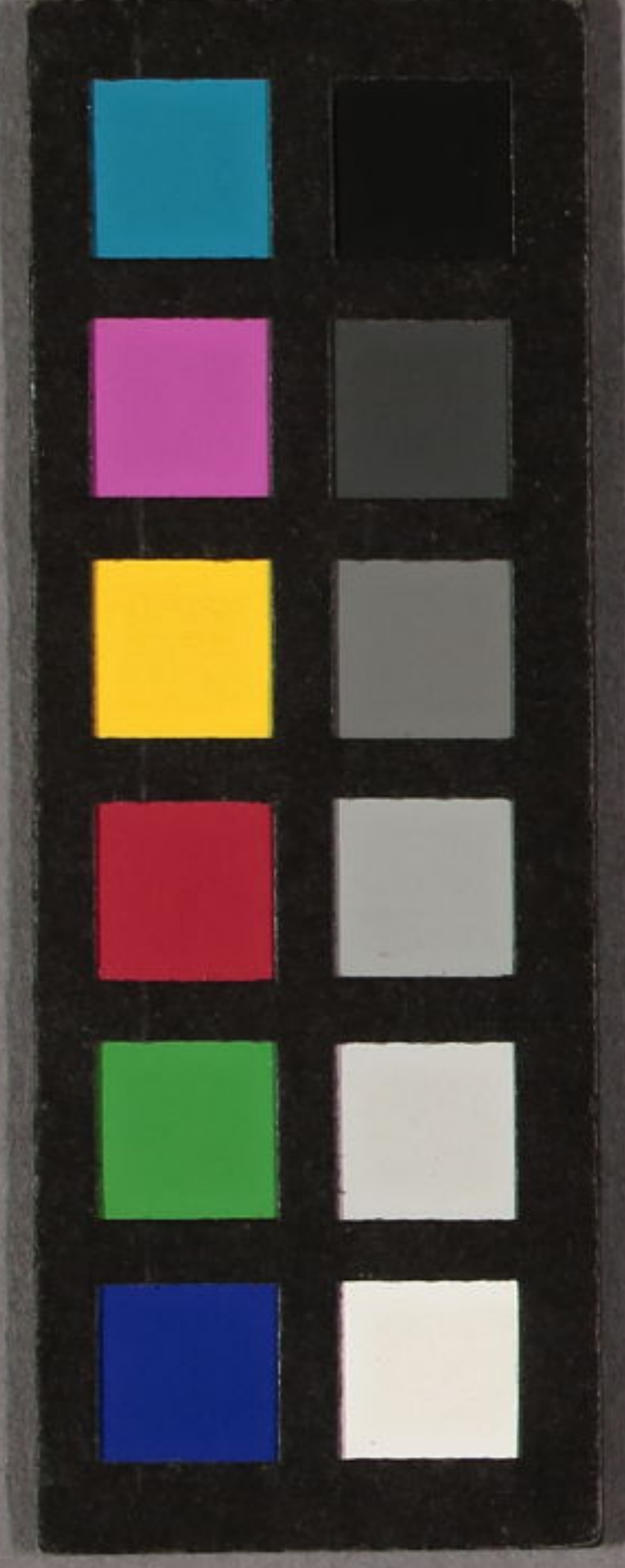




例
一
集

五



能譜一葉集附合々部四

古學庵佛子
幻窓湖中
坎窩久藏
編
校

元禄五壬申

其多や餅を煮する様の先
りそ去とる一食の所し
善父入ハ只義入と云をうけ
りくさふふり帯持こ
む、新肉類く、うきゐら
け、と吹ぬき、毎のちあけあ
る、

高の倉すくうつ村れ重き
 基ふれ町すもあつさつい
 くらくくもあつる物をみや
 瓦うよれハ花形朱就
 二三手まのハ骨おそく
 髪そとや——く尺ちふく
 中あうそけ焼つける月の
 襟おろきぬハ角力えの帯
 今あつてゆくや——原の峰まで
 夜明けの星のまきしつり
 法師の雪隠今も花うる
 白ひけ——紅の飛入
 翁、老、翁、老、翁、老、翁、老

二
 陽の傘をす側もえり
 手紙をたて人の名を
 本籍、あれハおのけ
 金とらけ——て紙をつて
 ね風のまん——ておまこ
 けふ、ゆきと雪つ門
 湯ハあや——て水新
 一匹——てあつる
 小瀬市の対うなる人
 痛、あけきハ女あつる
 ちていす——て月の入
 何の板——て板の
 翁、老、翁、老、翁、老、翁、老

二の丸の芝うくやく垂屏印
 向もあうくして何人の節は
 さくしと茶屋の食を喰ひあ
 口よりして之より居 堂
 又神の節にさうに喰ひあ
 多居を越してのひき 板
 翁 老 翁

多や小館の芝む二段 漱
 板とすさる岸のかり 株
 又知らしてきくすれもえわく
 刀の柄うくして 杖 第
 利牛 沾蓬 翁 湖風

合宿の後を何うく何の月
 屋宿しおふき友とら
 小権うきふ本橋のたおし
 船一又うに歌をうく 花
 菊菊の色の足ふと改、びと
 多うの末え 展の 数 捨
 尺の何れの子供うきふの能
 古ふすうきと人般をも 狗
 ちさうして何所を何く原を
 森を越く後、喰ひあ
 月影の向い 佛の 基 寺
 ぬき人 課うき 草の 節 歌
 翁 牛 俗 花 曾良 牛 桃 翁 風

風 鼓

翁 鳳 其 角 重 翁 聖

角空角空角空角空角空角空

船を浪よしくおのけし
堤灯をゆるり町へ入に
女房ふみ米屋の事さるやふ
う田の喧嘩さやむし
ふさふさ舞の舞ふ枝をわし
ふさふさ舞の舞ふ枝をわし
牛の子は牛さうせうし市の中
江の枝垂の田舎 陸尺
とめさうと取入月さる洞隠さ
いづこさうと時めくさ
頼りらる四さおきさる表
すんすんめいさる万足守

角 空 角 空 角 空 角 空 角 空 角 空

一ふいハに戸をくさる小高ひ
みさささ返り神の門 ち
紫ささ未末を輝ささけ
三人咲ふまめさささ

空 角 空 角 空 角

芭蕉庵舎

風流のまじりてやけり
旅のさ難さるのさめ空
砂川さひささ又冬めかささ
門らさひささ露ささ露ささ
月つねをえささぬささ熱さ
志ろさあふささハささ

青山 曾良 渴子 嵐

涼葉

岸を眺めよきをわづらふ雪の才
 めくみくらひとらむ陸尺
 しのめう人もそくむ契うし
 くらもめくう候ふを去
 けと痛し顔をかぐし合
 木賃 海りハ不致をさす
 入うけも 細ふ言 妙の 船の月
 塔をいふて 臨を 印を 枕せぬ
 くらふふと 隣を 印を 枕せぬ
 小船の又を 送る 村
 け花う 米 古 庵 やとめ けむ
 寺のくれ 本を ありす 水を

然水 必水 嵐雪 紫 翁 怒誰 良 山 妙 子 紫 然

入物も 田 際う 似て 牛 荒
 かうも きけハ 念を 果
 長う ぬ 弊人 冬に 受 冬
 ちと 手う れて 信 居 若し
 火 桶す ぬ ぬ 腹の 胃 諸 跡
 夢 夢の 粉う 聖の 振 弱
 返る 夢を ぬ 手 紙ハ 掃て 枕 ぬ ぶん
 おとけ 点ハ 点のお 知し 夢
 貴 夢を 風う つか 付ら い 夢のお 沙
 先々 和う 秋の 又 くれ
 柿 尺 夢の 夢 夢う 尺 細 っ 底の 月
 偏う つれて 小 舟う ことむ

紫 壺 山 壺 子 紫 壺 紫 然 良 翁 山

良子然榮雪

史邦
液圃
菊
每可

篇可類 篇可類 篇可類 篇可類 篇可類

す人すゝと萬代たふむ花の色
光るゝとふらぬ侍娘のまゝ
ま風上吹きわくくき若湯衣
簪すふらるゝ百あめ家
以る所く癒くる魚も化粧し
蕙しゝゝゝ白芽堀の夜衣
様去厭解あきそゝゝ様衣
并當にゝゝゝの居衣布
ゝゝゝの休後十宿とまゝ
名古きゝゝゝ通哉の骨子
悴ゝゝゝみあゝ松の百ゝ
彼とぬゝゝ膏の月蝕

比可翁 比可翁 比可翁 比可翁 比可翁

お志もぬの上さゝぬゝゝゝ
あゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
動めゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝ小娘ゝゝゝゝゝ
句海ゝゝゝゝゝゝゝゝ
纏ゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
塩あゝゝゝゝゝゝゝ
奈良ゝゝゝゝゝゝゝ

可翁 比可翁 比可翁 比可翁 比可翁

帳子ハハゝゝゝゝ 物衣
病一外を稀のこゝや 賃

史邦 翁

美の種と習ゆの鱗をかきおろ
夜市の人々もさうさ 月
木刀のききし ころ居合の
二階よりこの音よき 板
ききし 二階の音を吹きて
石丁あれハ ぞ 踊ちの強
手細工の 舞臺をふかへる 膚
吹くともいふけぬ 小松魚
肌をふく 味の物 春の山
秋入の 筋をいふ ころ
喧喧と 踊つてふく 音の月
ききし ころいふ ころいふ

水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶

おろの 新判刀を 踊るき
ふく 家の人々もさうさ 物
花の 舟へ一舟ききし 物
小姓の 口をききし 二月
竹橋の内より 音の 穴
ころの 音の 音の 音の
夕暮の 洗淨 音を 投げて
ころの 音の 音の 音の
横より 音の 音の 音の
ころの 音の 音の 音の
おろの 音の 音の 音の
ころの 音の 音の 音の
おろの 音の 音の 音の
ころの 音の 音の 音の

水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶 水 瓶

枕よりしき休材木の行ねもい
 ようとそそれぬ中ハ生 登
 いふとけし語をきかぬ月や
 昔ふとやちて時のかげに
 柳花と枝をいふけりし
 降子来る 宿之のふり
 小南まはるやめりこい
 二歌ふは枝のうらさ
 春の芳野をめぐりてさう
 百姓 やさむ苗代のいふ

水 鈴 水 鈴 水 鈴 水 鈴

草庵懐故人

名月や海に市のくれを待
 空より枝のくぬ虫のき
 秋を語し庭のささる石の色
 まるふとあはれぬ海のうら
 端々ぬ鼻紙をふとこころ
 ぬれハ坂のいふえさ 流
 猫人の矢矢のけしきとて
 春ふとあはれぬ海のうら
 入はれ海にうらとこのむ
 きうといふ庭の鈴板をとく
 舟こそう枝のくはしめさ
 ねとるこころのいづ子

子 子 子 子 子 子 子 子
 川 筋 子 筋 子 筋 子 筋
 川 筋 子 筋 子 筋 子 筋
 川 筋 子 筋 子 筋 子 筋

筋翁子筋翁

史邦 岱水 半落

龍氣
弱水藥 弱水藥 弱水藥

翁落木榮翁落木榮翁落木榮

青 綠 葉 菊 水 菊 墨 菊

翁
酒

昔の月柳のうつろふをよめて
 切なかりしを先きよき
 松山の煙ははるの哭き
 船燈の光をよき川舟
 秋の夜の清きうき小豆粥
 ふりう月清うんてはふ酒
 掛きつるまのやも持てや
 窓の縁に尺をうきふかき
 中へうき山登る中へ
 正音安のむ風の静きよ
 月のとくに先きよきまき
 きゆるまきうき静かき
 水 菖 蒲 菖 蒲 水 菖 蒲 菖 蒲 水 菖 蒲 菖 蒲

清きうき花の雪の月柳
 水智のお山のまきまき
 うきめすうきまきまき
 花とくうきまき海へ飛ぶ
 所中のまきまきまき
 吹くまきまきまき
 草の葉にまきまきまき
 伏尺のまきまきまき
 玉のまきまきまき
 水智のまきまきまき
 山代を切しうきまき
 澄かきまきまき
 水 菖 蒲 菖 蒲 水 菖 蒲 菖 蒲 水 菖 蒲 菖 蒲

水 榮 堂 翁 榮 水 翁 堂 水 榮

鼠竹 菊 小艸 菴藥 竹 薔 銀 景 昌房 西秀

卧高
探志
游力
野徑
去來

翁

許六
洒堂
盛水

景堂六翁水景堂六翁水 執事 景堂

翁水榮堂六翁水榮堂六翁水

卷六 水鏡 卷六

二日 一 宗 宗 宗 宗 一 斗

宋玉外の序の仕合をくし

酒堂
許六
翁
六
葉
翁
六
葉

六 卷 六 卷 六 卷 六 卷 六 卷

丁士をかりて悉くきし戸のくさ
月夜に雲を流すもみか
火とくくく石のくく子供を
先續くくる手ぬ物 朱
くつとくく門の瓦をきつて
言観るくくかく崎をえ
くくやう学問をえきま
なりぬの拾う流るくく
くく垣を木をきつて堀の内
くく森くくく二月 菊
ゆきくく竹の蛇のくくく
柏樹くくくやく宮川の上

書 六 菊 六 堂 菊 六 堂 菊 六 堂 菊 六 堂

支梁亭口切

口きくくく堀の底くくくき
笋尺くくく美のくくく
山雀のくくくくくく
秋のくくくくくく
旅人のくくくくくく
大戸をくくくくく
くくく玉子のくくく
くくくくくくく
みくくくくくく
くくくくくくく

支梁 菊 堂 利合 酒堂 盛水 桐案 也竹 菊

こころのちも志はる城の
置るふくくき坊の
とくくと陸路の石の上
酒し乞食のややすく月
行雲の長門を秋を
あけり朽りむ一縷の清
西り入るを流の百半床
首の二葉のりてけのめく
ねをハき季のけ柳の思ふれて
先りやうくく解かきの言
咲初しきのかむようも旅
うの涙の枇杷のいすい石

合堂水葉花梁竹案合葉花

ん早くと頭もくもあふ旅の
きよけりけきききく社
りさうに鶴をきききき
みよりけ房にききき川
あはきの綿のききき月
らん黄きききき門の坂
皮をきき物きききき月
上毛吹きききききき
谷伝ひきききききき
方々おけききききき
物きききききききき
ききききききききき

実竹花合葉花梁竹案合葉花

執事

荆口
酒堂
翁
此筋
左柳
大舟
千川
翁

畫板筋川畫舟川筋板畫

あきしめハ後をおろそ
白頭きくう一戸新し
中頃の破り切の棒さけ
内ハ後ハ皆捨く
鳴吹ハ板の裏をさく
板のほらに急ぎさぬ
すれ戸子袖口あふの袖
果ハこれ（授子の時
泣叫して土窓あふの袖
師念法し強念を
門（子母のかき）紙破る
むしろむれとくす強
強

凡峰
翁
酒堂
鳴
翁
里東
翁
鳴
東
堂
鳴
翁

ふけをさけくいらすの
梨地あけ火のつけ
名月とや舟の橋れ一さけ
とーの米を背あふと
花子あし家名を佛は
まハかろくぬ三橋の人
陽光の庭子探る杭
あふと衣子草薙おを
きんと子娘ハ母の物
急のつをれを足し和
埜代のあしきうけ
み徳ハ侍吹てきふ秋風

翁
東
堂
鳴
翁
東
堂
鳴
翁
東
堂
鳴
翁

夕月より露をぬくをわづらひて
 解ふふくすはすの如く入
 麦の文の如く飯を永くけし
 陶引す川舟の如く
 怪子千風も清き中小姓
 ゆり所返るるを責むる人
 其のきかぬの句ひを似て人
 人同くしと引あくる珠
 一息の地を極限の花さく
 怪子千風も清き中小姓
 ゆり所返るるを責むる人
 其のきかぬの句ひを似て人
 人同くしと引あくる珠

角 堂 峰 角 堂 峰 其 角 堂 峰 角 堂 峰

十二月廿日即興

歩よるて入られ梅山系
 海をわづらひの初雪の如
 月より露をぬくをわづらひ
 雨の如くすくすくすくすく
 夕月の如くすくすくすく
 如代さく秋の如くすく
 因りてすくすくすくすく
 肩より露をぬくをわづらひ
 足えりてすくすくすくすく
 夢を夢とて如くすくすく

角 堂 峰 角 堂 峰 其 角 堂 峰 角 堂 峰

二張の五紙尺すく枕し
けめふ猫の目をいふめ来る
あけやうき世嫁の息
硯はほと意やせう
夜の雨のさしあけさむ
三寸の紙を志しむ 唇
まひとつと噴をちやうの月
葉と菊とをさうの夜
おろちあふあふ友を秋の夜
さみさみ水もゆける戸植
山さめさうし丁らハ新し
あううううう合歡のい言

山 隅 棠 角 味 角 棠 山 角

かけむの標を。床のいふれし
おとふぬ船子屋の以侍
赤色やう常洞室の空うし
真うきういふくもを焼
尺ぬさうの主人の志をわね
すくさかかきうううさ
現しや早を皎て秋の月
うううはめあや低ふ唇
お年を止江流うハぼ山
息あられもていしうり
あうハ湯邊うあうがさう
おめをみうし何おう楊を妃

山 杏 隅 棠 角 棠 山 角 棠

菊

解六

菊

風集

洒堂

素堂

翁

其角

溪石

翁

普航

般血子

史邦

去來

又草

涼葉

1

4
14

翁

うさむねゆるお裁の柳
秋風もむらさきもささや布
虫も虫取ハ目さくさくあつ
机重く瘡の方とさくさく
まかすきなけし悔めり
尼ちの志尼ハひさし髪剃る
奈良ハむらさきの中さくさく
掛さくさく小細の端さくさく
さくさくさくさくさくさく
尺さくさくさくさくさく
拾さくさくさくさくさく
出来合く作製の料理を兼ねる

宗波 此篇 濁子 紫子 紫川 紫川 紫川 紫川 紫川

くさくさくさくさくさく
物ありさくさくさくさく
さくさくさくさくさく
石さくさくさくさくさく
地さくさくさくさくさく
さくさくさくさくさく
寺さくさくさくさくさく
夕月さくさくさくさく
尺さくさくさくさくさく
さくさくさくさくさく
さくさくさくさくさく
さくさくさくさくさく
さくさくさくさくさく

紫川 紫川 紫川 紫川 紫川 紫川 紫川 紫川 紫川

執事 柳紫翁 門 函 翁 紫 柳

翁

喝子 漆麻 野城 利牛 念波 曾公 子箱 坡坡 榮坡

けりゝゝ和の浦の初
秋とてや外ははる——著
清く——子の子の影をやる
まわ——まわぬハ花の
ぬの襟を——ふ麻のぬ
まのち十六の時（子
は千々わくを——むねを
智の一人の涙を——まを
え手振るぬれ——片き
むの——きぬ字の長ふを
丸はす——の鏡の鏡
涙を——母の涙を極め

良子牛坡翁 良子牛坡翁 良子牛坡翁 良子牛坡翁

木端のふまの字のあ
足場より月の面を一寸
麻のふまのぬれ——片き
念仏のちのふまのぬれ——
四と十のふまのぬれ——
義かけのふまのぬれ——
男と女ぬれをぬれ——
宿入もとや——まのふま
切株も木ハ花のふま
陽をぬれぬれぬれ

良子牛坡翁 良子牛坡翁 良子牛坡翁 良子牛坡翁

五人技持たしあひて、柳うね
 日如く（手）をぬのき
 精曳の舟をひきよに山こして
 そくくをけけの種子の勢い
 吸くあつてもめけぬ水の量
 利のふたて酩酊をひき
 九三手結くくねくもいそいで
 境のふくすれくすく地をぬ
 古白くねくねくもそのま
 けききくのふくく強て強きく
 腹繞く衆を一向指しけぬ

野坡
 篇、坡、篇、坡、篇

数入せいであつて、れて位
 強弱を懸うする秋文、
 く又あかすす原の力け
 只（く）とく（の）海をくくする
 ちの以佛く都のくも——火
 咲むく十府の芳菰あきあき
 ちや藻くくけく揺るくく
 ちくくしとくくぬあきまの風
 捨のくくくくくくくくく
 け義くくくくくくくくく
 焼味、味の灰中くくくく
 一振くくくくくくくくく

坡、篇、坡、篇、坡、篇

久しと小き力とつらと
 おえくろを黄ひの中戸より現
 むの紫羅のハ昔にやむ
 市原よりそとろと解くま
 神あむる花々言と以
 月けは小岸仲原のきとい
 昔のまおとろをいふる机
 ちくくとも桐の紫羅のま
 土竹の何の巻の終古
 水とくおとされて幾
 猫可きうる人そふい
 何のちお花ぬ工丈の何
 掃月のそいふく

坡、翁、坡、翁、坡、翁、坡、翁

八九百とて雨海柳可
 吉の物れそくけろ
 初宿しうてそくめ
 肉をそくそく吹
 きのふくく和るる
 物背のれし肌
 志ふ柿くくく風
 除く法とる祖父の
 招きうくくく

翁、治圃、馬、里、翁、翁、翁、翁

詒里莫訥翁 莫里翁 詒里莫訥

翁 范 里 翁 沽 里 范 沽 翁 范 里 翁



孤屋

利成 牛全 菊

三十一

うらたけをよめくす
ほろのしるもあまはらう
まわされうきをきく
まのちうすうんてふか、けいふ
宮をさくさける智基
そのうち宮のけいふをさくす
手負はくことわたりぬ
息災の祖父の白髪のためうきよ
世思ふぬ七人の思
名月のうち金をもふき島
すく（うき）あまのうき
けいふはあまの通りくす

牛 鹿 菊 牛 水 菊 鹿 水 牛 鹿 菊 牛

山の根際をぬきうき
横をうきうき（風の吹く）
きくうきうきうきうき
いんも女子はくうき
よのうきうきうきうき

水 菊 牛 鹿 水

十三夜焼やうき
小袖の袖をうきうき
焼飯うきの粉をうき
お花のうきうきうき
高きけいふのうきうき

濁子
曾良
菊
史邦
秋風

涼葉 出水
菊 紫 子 風 鈴 柳 水 子 良 菊

良子翁良欽水欽紫翁水欽

枝もく菊の揺らけさき
あめあめをけしる青の葉
揺らけしめしけり青の
袖をいへいのおき安う
かきし屏風をくさくさ
花やさきも我なりしうき
や海合のそよそよ

紫子良水風紫

十の枝をくさくさけ
新よのゆきをかきさく
そそく枝をけしめしけり

菊
濁子
盛水

肩の枝をくさくさ
尺之とくをねりし
あま葉をくさくさ
すつきあふ女房の
夜すくくめす山
若き子けしめし
くさくさの舟し
静の葉をくさくさ
化粧の枝をけしめし
枝をけしめし
くさくさの舟し

依子
菊子
水子
菊子
水子
馬寛子

うゝみとてや琴の如く
あゝ十と色も花さう
瓜をまゝの楊子の湯も物
手れを清沙の人の泪
あゝうれはんかかく
持けぬお友を友がこり
うれはんねうううう
又川のちやうの涙を踏ち
そ祖のやうなを足踏
あゝんふ米の芽を積
うゝ大うううけゆみ
雨心の涙似うう水う

霜 良 水 花 子 良 子 葉 子 葉 子

大原の紺屋黒ううき
数おなくつあけ八牛と宿も
あゝのみあゝに鮎を
初叶の六里の松を伝ひ
あゝ子雞のうめりや
あゝ水を龍の起すおめ
あゝすめのおのき
あゝハ雪のうのくむ
あゝ風さうす谷の細布

霜 葉 子 葉 子 葉 子

秋月廿二日
振るはるやうれいす海

霜

海でハヤミみ出する肝
高匠の榎の小節を扱ふぬ
けちけ山千鳥を尺の
み物の餅を強さぬ秋の風
ろく木の安ふ玉の家
雲のよを法を舟にあらけ
星さく尺の二二十八
ひくくハ珠軍の大方し
淡雪の雪千鐘淡もさぬ
的くむ智松灯を吹け
肩病とたる湯屋の言
上至の干菜きさむとハ
ぬ

野坡 孤屋 利牛 坡 翁 牛 屋 坡 翁 牛 坡

るくやぬりえぬと志する
綿貫のちさくを神つて
堀の川ある五十石と
此島の怪鬼も多とす
砂子ぬくこれつる
新畑の葉も落つる
火くこれる道とく
川くの水もあふ
干物を日向のさ
端やう鴨の草
井用と浮きとる系

翁 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡 翁 牛 屋 坡

牛 屋 坡 霜 屋 牛 霜 坡 牛 屋 坡

子翁集子翁集子翁集子翁集子翁集

和田秩父ともいふる名堂
 掛乞の末にハ初をめし一
 よりそくくき月か枝お戸
 虫をくくくて草の成れ
 ねとすきと念佛のくね
 宿ハ難いのらあうくせのうけ
 破籠ハさ欠ぬくひすのあ
 二をみえきわくすの法ふられて
 口流つるア一帖の紙
 旅舎や長ぶ五月の永泊り
 名跡をのそく安藝の産を
 る竹ハ尺くぬ伯母と懐く

紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子

え米くくく酒の奥 庵
 焼立して庭う籠るる月の月
 走くくまくと組やふん
 上り舞ハ仮能と更子娘ひる
 うふみり屋の市て走する
 くの結と折紙をわめ流す
 紫菫菫とまき床のかこ隅
 時よりすくやと蚊帳を鞠うて
 海よりくくくお田の物等
 了す雪の上りゆふれのとるく
 徳の産をくくくきもの
 お花子子供のくくく袋 何

紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子 紫 菫 子

三十九

翁坡翁坡、翁、坡

坡翁、坡翁坡翁坡翁坡翁坡

坡、翁坡翁坡翁坡翁坡翁

終云々

生ふゝひとくわつ生は氣の
るけハフシ空気の薬
代古の飯屋をその内を足こ
五風石桶の梅を入りて
酢の類を持ち入れおいて行
^ワ
ろふも遊てろすか
親の時やうに醫者の名をも
せしき都の鹿のとちかう
香簾の下でつくろいなる夜のお
旅する物のためさへして
水 弱 水 弱 水 弱 水 弱

水風水風水風水

翁
沽園

有るは、この店を、
 三味線、
 夕月、
 不才、
 大貴、
 力、
 張、
 持、
 河、
 物、
 伏、

懐く人へ入るる羽衣
親仁くしとられうき
月むの青うし仕せうを
霞片くしとられうき
涙あふとくく（最ふまの風
門のたう）久 猿いさる
針の市うしとられうき
菰くしとられうき
鳥くしとられうき
雲の洞江の山をなま
入る松さくしとられ
佛師あをけりけす

菰 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

是紅の小袖に縹のあう
異洲の桑葉をうき
あふけの二階をうき
月を味くしとられ
紗の物くしとられ
埴子破るる袖のきり
秋の虫くしとられ
な加帳くしとられ
不乙候くしとられ
田舎の谷くしとられ

菰 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨 蕨

拭

子

然水

依、

曾良

弟

三

野坡

KL

213

子

良

凡

坡

良

依

坡

執事

二

圖

一

通

福

馬竇

四きうに月尺のほの葉め跡
あうちくしと通る次
里 估

廿角

まうれしあえ際き
あ際もゆつあき
出代のあ物をきき
あき

毛純

梅らまや通るこれハラのき
あき
あき
あき
あき

木導

ま風や麦の中ゆくあのみき

あき
あき
あき
あき

利牛

あき
あき
あき
あき
あき
あき

あき

野にまき園うあき

あき

あき

あき

あき

あき

あき

古将監の古実をくくして

菊

月やその時の木はりのい
松人あられハ折りの
あきし煙又の村をきく

枯園
其角

雪の松折にぐれハ折まふ

秋江

のわつあねあきき
二番を一般に折りけり

孤屋

万とまきくハ大ハハ
あきし折り風ふハハ折り

子酒

葉をかききききききき
葉をかききききききき

利牛

菊

雪のふの大松若ふきき
一通りゆく木うくハハ
あねあね折を減きく
火さききききききき
物の葉のまききききき
くくくくくくくくく

玄舟
舟竹
菊
命
竹

元禄七甲戌

菊

梅うくのりききききき
雪うくハハ折りききき
あきききききききき
あきききききききき

野坡

上のふりうりあつる米の直
おのうらほくこときし月のき
敷くし新す秋のきひしき
おひく菊もくくし連恋さ
娘をかき人子あをぬ
奈良通い同一くあつ細き
くくハ雨の降ぬる月
くく啼きあやわ川岸
ひとといひあすおひの
よきすく尾のお病をおき
菊菊けくくあつる月
初月を掛ら代敷て尺

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

あをとおも子居合一めお
所定のけくくと寝て花のけ
門てあさくく生すのき
くく風くきくあをひ
只あさくくにあさくく
江戸のあさくくあをひ
くくくくくくくくく
方くく十夜くくくく
桐の木さくく月さゆく
門あきしけくくくく
あさくくあさくくく
初月を女所の親子あさく

菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊 菊

翁坡翁坡翁坡 坡翁坡

福

千川 涼葉 左柳 菰川 板菰 青山 菰川 紫山

すのこちをへえきし
 巡礼の伯し旅の日のくま
 兄より兄よりけしきね
 花んともさる系中の暖り
 くくハ梅子さるお娘
 けしき海路家の書を忘る
 むくくくくくく木ハ
 湯より信衣千石をさるく
 夏の破れり入るお
 きいさき橘よりをへきと
 きのさきくハ何ゆの
 新島寺の染よりそく

河 遊 系 筋 板 紫 此 筋 系 山 系 河 板

海原の門をくく月の歌
 人足の紫目引ゆおきつ
 ふを引れく多ねんきく
 早むくくくく死
 海より雨さくく様の
 随分のけさくくをくく
 火よりやき門の強物
 院内より河川をくく
 喉とくくくくく
 けまハくくくくく
 姓めせいのくくく 代

紫 大 舟 系 筋 板 紫 河 系 河 板

口
十
大

口
十
大

卷之四

卷之四

せんやもくわハ福そのくむ
 能携れ書をけりきう入る
 尺五よりたぐりあハ引こむ
 へりけりてしきくおの月
 すと花もあふき麦のそ耐
 柴栗の葉こころとほめて
 不ろく木より人よりまのいふ
 いそろく一向指し供ふに
 葉とむむひはさきし
 その宮よりきりし海柑る
 口用の玉をきりしえこむ
 庵に高き草屋のきりしえこむ

葉 風 冊 葉 葉 風 冊 葉 葉

小舟波廻り池のふみ

新

新

新麦へりきりしきりし
 うちお故帳のきりしきりし
 了けりきりしきりしきりし
 四五石のねりきりし
 方より醫者を引ききりし
 踊りけりきりしきりし
 金ころのけりきりしきりし
 けりきりしきりしきりし
 葉生るきりしきりし

山 店
 葉 店 葉 店 葉

店翁 店翁 店翁 店翁 店翁

翁店翁店翁店翁店翁店翁

翁、店

蜀 素賢 蜀 蜀

賢川翁賢川翁賢川翁賢川

牛流す村のさくらや五月雨
春の吹く梅檀の花
一枚のむらさき扇を手に
抱く小庭の古き松さ
有彩の菖の生海龍のうら
堤初めは田の中は花
家（ハ）あよ作原の古き
お斎ハ月う十五を祈る
秋の長き朝の空を渡る
鳥（ハ）野のさやうを渡る
抱いて松原のうらさうを

銀竹
吉来
菊
惟然
支考
末
然
野明
智

ゆふ人（ハ）うきうきと
雨乞のさう（ハ）に降る
紡草を（ハ）に根家のま
植えて庭のまを（ハ）う
春（ハ）さう（ハ）浮世のう
さう（ハ）ふ（ハ）花さう
半（ハ）を（ハ）む（ハ）る
川舟の（ハ）う（ハ）る（ハ）る
堤（ハ）の（ハ）う（ハ）る（ハ）る
さう（ハ）う（ハ）る（ハ）る
さう（ハ）う（ハ）る（ハ）る
此頃の上（ハ）う（ハ）る（ハ）る

菊
子
然
竹
末
学
考
然
竹
末

明 然 翁 來 什 明 然 翁 來 什 明 然 翁

浪記

· 化 · 末 · 化 · 去來

小庭しき草の株のうへ何
謂ふのちよりくち起る底そり
梅咲そえて立花さやうけ
年中を松の内より料理喰
伊東の秋のいそぎきま
上紺の木綿合羽をかき指さ
湯屋の多きさへハさうし
名月の掬ねるまぐさくし合
一分てもあふ梨めきれまの
玉味喰の候はううの秋の風
不足れちをそ理おする
宿のきの押ひ次中とけく本

本・化・末・代・翁・末

点りけしやうお役め又
此柳をさへて通る船の船
春の風うわうて夕まの風
おめあふ石をさへるけ水端
陰仕をさへる士う合さふ
月うふ秋の塔梅をさへる
柳葉柳のうへとさう
さうふ石を踏むとさう
さうさうさうさうの候
さうさうさうさうの候
さうさうさうさうの候
さうさうさうさうの候
さうさうさうさうの候

本・化・末・代・翁・末

四五人通る信長京あり
新三河の子供の御方有能
いつともまゝとて其の中

化 為 末

紫かられをうけわて瓜の美くれ
母ねり 懐のふりてゝ
おけお持ち旅の人と唄へ
竹とお供めめくいとふ
半叶を、花のうらうらと月の入
火のくちくちと燃し 良き
新にをきくといふは、夢清き

吉来 浪化 蜀 之通 文草 支考 惟然

兄弟とも、兄をゆりむ
切きて 島見えさす丹波山
そらへ (お) きのく 文 物
家合ハ鯨のくみぬきさく
あゝすけー 新燈のさや
ちくちく風を吹て戸を敲
こきく (と) 我く 桑の紫
砂川の海くふりて 夕月夜
あゝ志くれとも 軒あやうく
百きふ花の本けの店屋物
そまゝね 熊こ 西を 見く
はちく 櫻あふく 吉来

野童 野明 末 子 学 考 然 量 明 是 末 子

臘場のろろおあがりし来
郭の内息をうてるとおきやう
餅つゝあけけけおきやう
羽子板のふきし一丁：船のぼり
僧上しよくききしぬ
茶小紋の結の十徳のすん
まふさくらききし秋ハきき
は夕月をぬきし山きき
時々ききしけの鳴きかきき
あきつゝ秋の庭のけきき
あきつゝ市の小屋掛
此ころの代物ききし新きき

是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有

聲と男けききし
お局の里にいしハけきき
きききききききききき
花のあけきききききき
なけきききききききき

是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有

関五月廿二日首柿屋新吟
お骨解にきききききき
万引けきききききき
村倉里よりきききききき
帰るけきききききき
月あきききききききき

是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有
是明堂然有

月よりさくさく田上の虎
 正月もやまはさかしく
 持つけし木くさくさ名代
 咲きのけしきさくさ名代
 はんもくけておぼさくやく
 白粉をぬれしもさ地元の
 紋者持振の衣のぬれ

子 堂 末 然 子 末

タラや夢子詩をさるる文也
 西をふさく数のはり
 ちくちくはれはれ魚のけさきて

有 翁 惟

丁のちくさくはれ多人
 一葉の珠てはれふれ月
 輝き積るる底の地もさ
 松茸の小伝持ねはさくはれ
 かんゆうはれ人さくさ
 基のけきき新屋のけき
 松の枝老子永瓶さくさ
 月のけきけきさくさ
 さくささくさくさくさ
 さくさくさくさくさ
 月の味もさくさくさ
 月影も名代のけさくさ

野 明 翁 然 明 翁 然 明 翁 然

行夷松如露明然翁明然翁明

執事 始星 始川 星始 川

為

翁惟野 翁然 翁然 翁然 翁然

去來然翁明然翁明然翁明然翁

明然未明然未明然未明之道

翁 如翠 以高 惟然 支青 翁 翠 然 青 翁

于翬翁考然于翬翁考然于翬

智然于聚然者 簡于聚然者

天
一
日

翁

安世

支考

定之

冊
野

牙

翁

喜

五

書

附

牙

美

絡通

龍

老

姓

炎

五

老

六十五

翁文就腔者無通葉文翁就腔

乾通五

福

木節 惟玉 支者 者 者

何の業ともなきぬ 大まきさ
右くして 咄のかゝる 宣嘩さ
うらち 曇のちの ひと 痛
佛壇の 障子 月のさし けり
深うら ちれ 落つ 秋 風
ハ 初め ね へ こそ け ね け
舟 荷の 鮎の 時 分 へ け
西 美 徳ハ 地 師 け ね の ね け
お け け け け け け け け
結 け け け け け け け け
之 袋 ね け け け け け け
手 ね け け け け け け け

然 若 然 若 然 若 然 若 然

かゝる 業とも なきぬ 大まきさ
何の 業とも なきぬ 大まきさ
右くして 咄のかゝる 宣嘩さ
うらち 曇のちの ひと 痛
佛壇の 障子 月のさし けり
深うら ちれ 落つ 秋 風
ハ 初め ね へ こそ け ね け
舟 荷の 鮎の 時 分 へ け
西 美 徳ハ 地 師 け ね の ね け
お け け け け け け け け
結 け け け け け け け け
之 袋 ね け け け け け け
手 ね け け け け け け け

然 若 然 若 然 若 然 若 然

桶と鹽とあつてき蒲
扱おそつてけし猫の近頃き
そつ物をかふる掃除は
花咲ハ茶摘くつちる素の山
けつつての飛る素の岸

然 翁 考 翁 然

松茸やうふ茶葉の底う付
秋のふ和ハ雲しかにすは
宵の月何系のを中けしに
つてハきけハ里のうす家
四五人て茶うすとはお能ちま

霜 元代 支考 雪楚 棟雄

いきうー 豹子龍をまうの
せのちをけつるハ何うと
屏風くつてして掃除は
ふつて上州米のえささふ
まうのちのえささふの合さ
荒ゆくふと人の上の意味は
風子とてさうハきり
いそつてきけつるハ木葉
三年つてと嫁う子のまふ
解のまうふハ人うとてさ
きさくつてとぬれぬつと
初むの頃古井結也

望翠 惟然 卓袋 代 考 芝 怪 嬰 翁 葵 萩子 然

夢のうきうきな寝たの 歌 望翠
 ういとうと寝るおろし 歌 去芳
 きうきうに寝る 歌 卓袋
 楊基のうきうきな寝る 歌 翁
 名うきと寝る 歌 枕
 寝るを割てくわの冷て 歌 翠
 おうきと寝てもぬえうき 歌 芳
 けうきと寝るぬえうき 歌 密
 けうきと寝るぬえうき 歌 木白
 角力うきと寝るぬえうき 歌 力
 けうきと寝るぬえうき 歌 堀

ういとうと寝るおろし 歌 望翠
 ういとうと寝るおろし 歌 去芳
 きうきうに寝る 歌 卓袋
 楊基のうきうきな寝る 歌 翁
 名うきと寝る 歌 枕
 寝るを割てくわの冷て 歌 翠
 おうきと寝てもぬえうき 歌 芳
 けうきと寝るぬえうき 歌 密
 けうきと寝るぬえうき 歌 木白
 角力うきと寝るぬえうき 歌 力
 けうきと寝るぬえうき 歌 堀

千かゝるの志ありて月
神主の沙汰を被り上りて
志ありて岸の体心代士
衣より被りて上りて
かゝるの志ありて月
耳儒をよりて上りて
行義の志ありて月
大少の志ありて月
宋の朝より上りて月

白力翠桂芳菊

清くしと第をもし板金小

望翠

牛のくも色を初めし
初月之難きや一虎を振
すれはすくはる豆腐を
大ハの通るくもは
少老の志ありて月
疲ありて上りて月
世中一生を被りて月
嫁入の志ありて月
杖より被りて月
一任するきまより月
鮎釣ありて月
大少の志ありて月

惟然
太芳
雪登
旅雄
菊
車袋
九節
芝
翠
鮎
福

芳蘭芝菊 芳蘭芝菊

紫翠然其芳若雲霞

疎る故に給きしる物なり
 雪を
 柑者ふりて子足するさし能
 霜
 夕月あつた松ハ宮へあつて
 古芳
 へす柿いろと咲く露
 風を
 ありとそえぬ二人走るに互ひそ
 玄白
 こしらけけ至るのゆけふの
 若
 煤並に同利のうちを付て
 定
 泊しそき門の解
 大木
 大木の梢ハ枝のけむ
 麦
 時を麦印してこけ、徳物
 芳
 山吹うつゝい集て来てれ紙の
 蘆

一里りてく宿をとる
 白
 掛物の布衣の息子月さして
 若
 百の葉をきくくす
 芳
 秋風の雨ふるく川の上
 命
 かしら何ハ舟を矢折るし
 命
 美濃山ハゆるい花の咲けぬ
 蘆
 ときとするぬきまの形
 蘆
 二
 ぬきまのぬきま来たる切目
 角
 何とぬきぬきぬきぬき
 若
 のうれぬやまきくハ来ぬきのま
 麦
 柴焚うけと遊ぶふり
 芳
 雪竹の杖のふりてむきの業
 蘆

山はなをさるるまのて
 芳のうけや 枝の掃と先
 雲ふあれや 月を流る人
 雲のいづれをかさつ年
 乙ひきろ 流るる 流るる
 月ひきろ 雲をさるる

命 其 芳 麦 命 龜

松風より新海をさるる
 月よりさるる 石のて
 河の門おほく 麻の流るる

支考
 藤 龜

見るハ 流るるの 流るる
 廿りとも ねわいす けうつ
 この山より けうつ 木
 麻あふ 草履の流るる
 床て 天をさるる 木
 更いす 流るるの 流るる
 雲の 木をさるる 木
 仕合と 木 木 木
 けふけと 木 木 木
 せふ 木 木 木
 大工 木 木 木
 月のあふ 木 木 木

雪 雲 惟 車 望 木 其 命 其 命 命

卷之五

ぬふれてくゝの 畑の家 窓
 母すゝもふれて月の物さひー
 鼠の籠る 花菜の中
 傍家の窓を越ゆふ入粒の向
 さくれむしう ぼくは志むし
 か食ふハむしひ 命きのいの 昇
 せんとの 風子人 死う 阿つ
 ちをさふふ ちね 粥う へて
 さうけえ 駱の ちう 切
 潮の 今ハすゝうゝ 為 暫 張
 か 滅の 果 志の ちう ち ち
 消 滅を ちうて ちねハ ち ち

齊翁翠錦翁唐然其錦袋其齊

こぼれてさる 軒のむけー
おみの鼻のほろろを尻の業
細ハ吹やう 牛のほやつく
枯もさうふもさうもさうも 楠の枝
月見のつりも造化やうも
智もゆもくもさうも 秋の風
候のか家をとさうもさうも
懐もさうもさうもさうも けぬ
いそふの齊の白豆腐もは
さうもさうもさうも 花の枝
根毛つもさうもさうも 鳴

紫 藍 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫

沾圃

獲るものもれさうも 木の根をい
なをさうもれと勢ある 家
水かき 池の中うもさうも
藻井さうもさうも 葉をい
難うもさうもさうも 月の
通うもさうもさうも 秋
色はさうもさうもさうも 魚
屋のわさうもさうもさうも
舞うもさうもさうも 物
中さうもさうもさうも 吉
野のさうもさうもさうも 振

紫 藍 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫 紫

ひとくつおろしききき
 常あしれき葉のほの楓
 山手門あつるの月
 神風ふくけの人のけり
 まる光のほのふい
 兄て通る紀三井のき
 花おひしきいも永き
 こら風の又西きあき
 家まき糸を太きき
 怪しき内まき度屋き
 喧嘩のききききき
 大切ききききき

然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者

ききききききき
 未っけきの床掛ハれ出
 真のききききき
 風ふくききききき
 赤龍珠をききき
 ききききききき
 病汗のききききき
 ききききききき
 大工はききききき
 米搗ききききき
 かきききききき
 此のききききき

然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者 然者

野のゆふのささめけめを

芳

惟然

松茸や都子らふ山の取

去芳

雨子踵手の志るふ秋風

旅雅

おもゝろく啼す耳月曇り

弱

すこ入人あふ次の風ゆる

然芳

くこふさるさるそく豆あ

然芳

このさくさく夜来し啼

然芳

あけぬ熟柿をこむすく移

然芳

至し也く一停あめの後

然芳

底さるくして古風の来さる

然芳

肉茂むて来つ風のそれ際

然芳

ちまつるく又と痛め改るけ

然芳

と膏ハ冷つは芽生るの膏

然芳

るめくふくそれ一く

然芳

尺すつほれお魚籠の内

然芳

るくはくはく丸のか

然芳

踵を引くつ 響の上め

然芳

行よの市にきてる底う長谷川

畦止亭あし月をんけ

弱

外うつてかふ替つ月尺くれ

秋のゆきくに魚荷をさる

畦止

家のありて地を新修し範喫て
いりとのちやまこのむ中 帳
此下ろと来て去月をききし
板の枝をたれり 色 いろ
海川に下け玉を引てん
火のともり いろ 青のつやけ
まといハ板のうとんのつやけ
坂下して 一里 舟と来
思けしきとまを 牛の糞
村のむ尺女を 集て 病
嫁とハ女くうし 時をりけ
大るうろるこれ秋の書やけ

惟然 西堂 支那 之道 青流 止 然 堂 弱 派

けの書をも又書く 新の月
すきの中へ 蟬のういこむ
病ふをてまれ 遊ふちのけ
おくく ぬまの 旅人
何くく 旅の書 ぬまのけ
志くく 人けく くる系 延
めくく 油の書 ぬまのけ
又くく や 胸の書 ぬまのけ
名号をもく 尺女を 集て 病
竹橋のくく 山川の 末
大根も 細根を 集て 秋の書
名後を 集て 月を 集て

止 然 堂 弱 派 然 堂 弱 派

然壺壺流花菊流花壺止

然壺壺流花菊流花壺止

車 力 遊 詠 惟 支 力 聖 力 考

然盡力爲庸玉

名

泥足
支那
游力

飄竹 車窗 洒毫 畦止 惟然 兔枰 足 腐 考 竹 然

何となくと色づつてふ雪の蓋
雪のく——れわうふう風
葉をうきぬる世をうきを
清きわう夜の——むし
上はの橋の音うう川の音
極細の中を静のけをつく
小かひひと不気味なやうな
行の仕か——のやうな
月影もやうに細くおのれ
杖——一本もその細さ——
形影のそれをも神のぬきれて
えらううに娘は——うる

壺女 然 竹 壺 女 壺 川

餅ちきうの隅のやうな賑うさ
おぬきうの静てうさあは
細い水の流るるやうな
極めさ——木——う 仲り

壺 女 壺 然

百葉中枝の木戸ううのう
第——を杖ううう山う
味うう静ひと静の静うれて

翁 浪 記 玄 未

和うううけうううのう
田柿うううううのう
起

如 舟 翁

兼頼ちやむしるのけや久遠し
雪ふけゆく空陽道の花 翁 出翠

いふつりく歌うえの戸はうれ
ちふけ境りのひる 庭 桑 翁 花鑑

清きわの海の小きく秋立て
ふたれうらふち秋のりく 翁 芳
又おむしるのちき家のち
松屋こもつ山の中へん 翁 花鑑

おしやうへささけのちのち
雪ふく

故きちやうとくぬね出 翁

秋風ちやうたれてち 海のち
依りてちけし編のち 泥 柳竹
ちうたて秋風のち 翁

年歴不知 吉来

松松ちやうすのちけちるみち
誰おもしるちけちるみち 翁 新六
いふちやうたてちのち 翁
長心朋ちやう四五ちのち 翁 常良
吹ちてちのちの月ちる 翁 十那

卷之四

枕風

三つうおるを新て付あひか
 らふしとあふハ既知の故しと
 不の鬼欠ししとの法の大
 箱

2

V

2

冬のきぬこのゆきハ作く
世のくみいさへ六位のきんすれ

くみきくみはふくくすれし
尾のりくくくみ霜の積

春のうき火くくくくすれ
くぬる玉のお練のきりりき

ゆきくきくくくくすれの肉
二町年く西く破のきくゆき

秋の風に豆かき線 吹
きくくくくくくくくすれ

小僧ふくくくハクくすれ
新解のきくくくくくすれ

象意ハき線とすくくくすれ
字目くきくくくくくすれ

すききも切て通くくくすれ
きくくくくくくくくすれ

浅おろしうく梅の裾く
 更科の里の砂をゆりしり
 端居うられしゆきみ石竹
 夏あうきうきくと物々山
 新うきうきのあくもあれ
 隙うきうきと猫のま白
 人うきうきを火燈うきうき合
 海走のうきうき指うきうき

四
心—きのうハかゝる秋之
きのうハ花のあゆみ

俳諧一葉集附合之部 終



